

日本の観光地理学研究におけるフィールドワークに関する一考察

呉羽正昭

キーワード：フィールドワーク，観光地理学，データ，聞き取り調査，観光目的地，観光行動

I はじめに

観光はさまざまに定義される。漢字で記される「観光」と、カタカナの「ツーリズム」が異なるニュアンスを持つとして扱われる場合もある。世界観光機関（UNWTO）によれば、「ツーリズムとは、連続する1年を超えない範囲で、レジャーやビジネス、その他の目的のために、日常生活圏外に旅行し、また滞在する行動」と定義されている。一方、観光もしくはツーリズムには産業、すなわち観光産業を指すという定義も存在する。このように、観光もしくはツーリズムはさまざまに定義される現象であるが、以下ではこうした現象を単に観光と記述する。

このような性格を有する観光と地理学との関係を考えてみよう。その際、観光は人びとの空間的な移動を伴う行動であること、また特定の場所・地域が観光目的地として観光者を受け入れることが、地理学で観光現象を分析する際の重要な研究視点として指摘される。地理学者は観光に関連する事象を分析するために、調査を通じて分析材料を収集しようとする。その際には、多くの場合、観光目的地で調査することがなされる。そこでは、観光資源や観光関連施設の分布、関連施設の景観調査などが実践される。加えて、聞き取り調査も重要な地位を占めている。聞き取り調査の対象は、たとえば、観光目的地に存在する観光協会や関係施設の責任者、宿泊施設の経営者、居住者などで

ある。もちろん、時期によっては、観光者に直接聞き取り調査がなされる場合もあろう。

しかし、おのおの地理学者は、分析のためにさまざまな方法で、さらには独自の方法で調査、もしくはフィールドワークを行ってきた。これは観光地理学のみならず、地理学全般に共通して指摘されることであろう。本研究は、観光地理学の既存研究を対象として、そのなかでどのようなフィールドワークがなされてきたのかを検討し、観光地理学研究におけるフィールドワークの特徴の一端を考える。

研究対象は、1960年以降に日本で刊行された査読雑誌に掲載された、観光地理学分野の論文とした。具体的な査読誌は、地理学評論、人文地理、地学雑誌、経済地理学年報、季刊地理学、地理科学、新地理、歴史地理学の8誌である。これらは、日本の地理学界を代表する学会が刊行する学会誌でもある。

検索に使用したデータベースは、科学技術振興機構のJ-Stageと国立情報学研究所のCiNiiで、2013年7月に全文検索を実施した。検索語は「地理」と次の語とをそれぞれ組み合わせたものである。すなわち、「観光」、「ツーリズム」、「リゾート」、「余暇」、「宿泊」である。内容的には、自然地理学的な研究成果は除外し、人文地理学の研究のみを分析対象とした。さらには、当該論文の主要な分析内容が観光現象と関連する文献のみを取りあげた。つまり、たとえば、農村に関する研究

で、主要な分析は農業であり、副次的に観光業が分析された研究は除外した。

また、本研究では日本における観光地理学でどのようなフィールドワークがなされてきたかを重視するために、日本の研究機関等に籍をおく研究者による研究を対象とした。また、本格的なフィールドワークの有無や内容が確認できない例があるために、発表要旨や数ページのみフォーラム記事も除外した。その結果、114論文が選択されたが、フィールドワークを含まない研究11件（展望論文と総論等）が除外され、103件が分析対象とされた（第1表）。

II 対象とする論文の特徴

論文の刊行年の推移に注目すると（第1図）、1960年代から1980年代にかけては、観光地理学に関係する論文が活発に生産されていたとはいえ、年に1本から2本で、刊行されない年もあった。それに対して、1990年代以降、とくに2000年代前半には観光地理学の論文は多くなっている。論文数が年によって変動するのは、偶然である場合もあるが、2000年代以降は論文の特集号が多くなっていることにもよる。とくに地理科学学会では秋季大会にシンポジウムを開催し、そのテーマとして観光に関連するものが頻発し、その成果が地理科学誌上に特集号として掲載されてきた。また東京地学協会発行の地学雑誌では、2011年にジオパークに関する特集号が刊行された。いずれにせよ、そうしたシンポジウムや特集号出現の結果、観光地理学に関する研究は増加している。

103件のうち82件は日本国内を対象としたものである。対象が海外に関する研究は21件あり、全てが1992年以降に出現している。その対象地域はヨーロッパが中心であったが、近年では東南アジアやオーストラリアなどのアジアにも広がっている。また、諸研究の調査対象地域のスケールに注目すると、狭い範囲の地域を扱った研究が多くを占めている。すなわち、ローカル（市町村レベル以下）が62件、中間（都道府県または地方レベル

程度）が16件、全国（ナショナル）が25件であった。

III フィールドワークによるデータ取得方法

対象とされた観光地理学の研究において、フィールドワークによってオリジナルなデータを得る方法として最も多くみられたものは、聞き取り調査であった。全103件のうち73件を占めており、およそ7割以上の研究において、聞き取り調査によってオリジナルなデータが得られていた。次いで多かったのは、統計取得（67件）であった。それに続くのは、土地利用調査（35件）、アンケート調査（17件）であった。

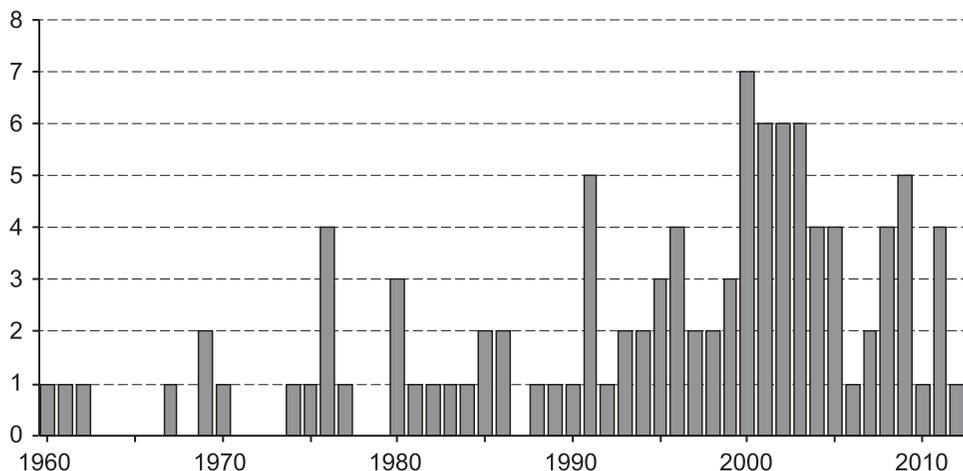
III-1 聞き取り調査

73件の研究で聞き取り調査が用いられているが、その対象はある程度の共通性を有する。まず、多くの研究で、公的機関（政府省庁、都道府県庁、市町村役場など）や観光関連団体（観光協会、旅館（民宿）組合、温泉組合、ヨット（スキー）クラブ）での聞き取り調査がなされている。研究の地域スケールによって異なるが、それぞれの地域スケールに対応した公的な機関では、観光目的地や観光客流動等について、実態調査やサンプル調査などがなされている。そうした蓄積に基づいて、さらにはローカルなスケールでは職員の生活空間とも一致するために、公的機関の職員への聞き取り調査によって有用なデータを得ることができる。また後述するような統計も公的機関が整備している場合が多く、観光統計からみたその地域の性格に加えて、統計の性格や利用上の注意を聞くことが必要であろう。一方、観光協会等は、観光関連施設の連合体という性格のものが多い。したがって、その責任者や事務局との聞き取り調査を通じて、当該管轄地域の観光産業の全体像について把握することが可能となる。旅館組合等は、同業者集団ととらえられるが、関係する情報が集中していることが多く、たとえば旅館等に関する多くの情報を得ることができるであろう。ただし、観光協会や旅館組合に関しては、近年は非加盟施

第1表 分析対象論文の概要

番号	著者名	発行年	フィールド	地域スケール	観光行動	データソースまたはフィールドワーク内容
1	小池洋一	1960	日本	中間	○	アンケート
2	小池洋一	1961	日本	中間	○	統計
3	野本泉史	1962	日本	国	○	統計
4	山村順次	1967	日本	ローカル	○	国鉄利用者データ、温泉関係統計
5	山村順次	1968a	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
6	山村順次	1968b	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史、地籍図
7	石井英也	1970	日本	国	○	聞き取り、統計、民宿ガイドブック
8	淡野明彦	1974	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史、地籍図
9	溝尾良隆ほか	1975	日本	国	○	聞き取り
10	白坂 蕃	1976	日本	ローカル	○	聞き取り、統計、郷土史
11	尾崎虎四郎	1976	日本	中間	○	聞き取り、統計、ガイドブック
12	山村順次	1976	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史、地籍図
13	田林 明	1976	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
14	石井英也	1977	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
15	小西正雄	1980	日本	ローカル	○	聞き取り、統計、アンケート(住民)
16	山村順次	1980	日本	国	○	アンケート(温泉旅館)
17	淡野明彦	1980	日本	ローカル	○	聞き取り、統計、郷土史
18	岩鼻通明	1981	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
19	白坂 蕃	1982	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
20	溝尾良隆・大隅 昇	1983	日本	国	○	聞き取り
21	Shirasaka, S.	1984	日本	国	○	聞き取り、ガイドブック
22	小口千明	1985	日本	国	○	郷土史
23	淡野明彦	1985	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
24	淡野明彦	1986	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
25	池 俊介	1986	日本	ローカル	○	林野利用、聞き取り、統計、郷土史、地籍図
26	田辺一彦	1988	日本	ローカル	○	聞き取り、統計
27	内田順次	1989	日本	ローカル	○	統計、郷土史、小説
28	Saito, I. and Kanno, M.	1990	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
29	呉羽正昭	1991	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
30	石澤 孝・小林 博	1991	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
31	八木清司ほか	1991	日本	中間	○	統計、ガイドブック
32	溝尾良隆	1991	日本	国	○	聞き取り
33	落合康浩	1991	日本	中間	○	アンケート(小学生の家族)
34	池永正人	1992	海外	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計
35	河野敏一	1993	日本	ローカル	○	聞き取り、統計、郷土史
36	神谷秀彦	1993	日本	ローカル	○	聞き取り、統計、郷土史
37	滝波章弘	1994	日本	国	○	アンケート(小学生の家族)
38	鶴田英一	1994	日本	国	○	聞き取り、アンケート(リゾートクラブ会員)
39	内藤嘉昭	1995	海外	ローカル	○	統計
40	滝波章弘	1995	海外	ローカル	○	ガイドブック
41	荒山正彦	1995	日本	国	○	文献
42	福田珠己	1996	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、郷土史
43	滝波章弘	1996	日本	国	○	アンケート(小学生の家族)
44	松村公明	1996	日本	ローカル	○	土地利用
45	溝尾良隆	1996	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計
46	フンク カロリン・淡野明彦	1997	海外	中間	○	聞き取り、アンケート(来訪者)
47	川口裕輔	1997	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
48	滝波章弘	1998	日本	国	○	言説(雑誌投稿欄)
49	森本 泉	1998	海外	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
50	池永正人	1999	海外	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、土地台帳
51	岩鼻通明	1999	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
52	池 俊介・有賀さつき	1999	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
53	溝尾良隆・菅原由美子	2000	日本	ローカル	○	聞き取り、統計、郷土史
54	中山昭則	2000	日本	ローカル	○	聞き取り、統計、郷土史
55	鶴田英一	2000	日本	国	○	統計、ガイドブック
56	池永正人	2000	海外	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
57	池 俊介	2000	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
58	フンク カロリン	2000	日本	中間	○	文献、統計
59	Funck, C.	2000	日本	国	○	土地利用、聞き取り、統計、アンケート(来訪者)
60	神田孝治	2001	日本	ローカル	○	統計、新聞、郷土史
61	上田潤	2001	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、土地台帳
62	池永正人	2001	海外	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計
63	佐藤大祐	2001	日本	中間	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
64	呉羽正昭	2001	海外	中間	○	聞き取り、統計
65	若生広子ほか	2001	日本	中間	○	アンケート(仙台市北部住宅地の居住女性)
66	森 正人	2002	日本	国	○	郷土史
67	大橋めぐみ	2002	日本	ローカル	○	聞き取り、アンケート(案内所名簿・村民民)、郷土史
68	濱田琢司	2002	日本	中間	○	ガイドブック
69	浅野敏久	2002	日本	ローカル	○	聞き取り
70	中井達郎	2002	日本	ローカル	○	聞き取り
71	牧田 肇	2002	日本	ローカル	○	聞き取り、アンケート(ガイド組織)
72	佐藤大祐	2003	日本	国	○	聞き取り
73	滝波章弘	2003	海外	ローカル	○	アンケート(ホテル)
74	須山 聡	2003	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、郷土史
75	佐藤大祐	2003	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計
76	池永正人	2003	海外	中間	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
77	渡辺梯二	2003	日本	国	○	文献
78	矢嶋 巖	2004	日本	ローカル	○	聞き取り、統計
79	Kureha, M.	2004	海外	国	○	聞き取り、統計
80	落合康浩・水嶋一雄	2004	海外	ローカル	○	聞き取り、統計
81	佐藤大祐・齋藤 功	2004	日本	ローカル	○	土地利用、土地台帳、郷土史
82	Maruyama, H. et al.	2005	海外	中間	○	土地利用、聞き取り
83	富川久美子	2005	海外	ローカル	○	聞き取り
84	小嶋悠希	2005	海外	ローカル	○	聞き取り、統計
85	浅野敏久ほか	2005	日本	ローカル	○	聞き取り、アンケート(ホテル、宿泊客、大学生、市内企業)
86	中尾千明	2006	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
87	林 塚也	2007	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
88	横山 智	2007	海外	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計
89	鈴木英志郎・若林芳樹	2008	日本	ローカル	○	ガイドブック
90	山口泰史	2008	日本	中間	○	アンケート(チャーター利用者)
91	井口 梓ほか	2008	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
92	小島大輔	2008	日本	中間	○	聞き取り、アンケート(来訪者)、統計
93	金 玉英	2009	日本	国	○	聞き取り、統計、パンフレット
94	小島大輔	2009	海外	ローカル	○	聞き取り、統計、旅行雑誌
95	石原照敏	2009	海外	中間	○	統計、郷土史
96	呉羽正昭	2009	日本	国	○	統計、郷土史
97	Cooper, M. and Erfurt-Cooper, P.	2009	日本	ローカル	○	聞き取り、統計
98	有馬貴之	2010	日本	ローカル	○	GPS、アンケート(来園者)
99	大野希一	2011	日本	ローカル	○	聞き取り、アンケート(ジオツアー参加者)
100	菊地俊夫・有馬貴之	2011	海外	国	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
101	鈴木富之	2011	日本	ローカル	○	土地利用、聞き取り、統計、郷土史
102	神田孝治	2011	海外	国	○	文献
103	Tran Thi Mai Hoa and Noma, H.	2012	日本	ローカル	○	聞き取り、統計

8つの査読誌に掲載された論文による：地理学評論，人文地理，地学雑誌，経済地理学年報，季刊地理学，地理科学，新地理，歴史地理学



第1図 日本における観光地理学分野の研究発表年（1960-2012年）

8つの査読誌に掲載された論文による：地理学評論，人文地理，地学雑誌，経済地理学年報，季刊地理学，地理科学，新地理，歴史地理学

設が多く存在することに留意すべきであろう。これに類する聞き取り調査対象として、観光関係専門家があげられ、場合によっては観光協会の責任者を兼ねている場合もあろう。彼らは、特定の観光地域に関する地誌的な知識を有していたり、特定の観光行動に関する系統地理的な知識を有している。

一方、とくにローカルな地域スケールの研究では、旅館、民宿、土産物店、観光農園、スキー場などといった個々の観光施設において、聞き取り調査を実施することが行われてきた。それらの施設経営者から、当該施設の具体的な経営内容や顧客の特性を聞くことのみならず、近隣の施設、場合によって地区内全ての施設に関する情報を得ることも可能である。

研究例は少ないが、旅行会社も聞き取り調査の対象となる。「観光の構造」を考えると、主体である観光者が観光対象を訪れることになるが、旅行会社は両者を結びつける媒介の1つとして位置づけられる。パッケージツアーをはじめ、旅行会社とのつながりの強い観光形態、もしくは観光目的地においては、人びとの観光行動は旅行会社の経営と大きく関連しているためである。

以上の聞き取り調査対象は、観光者にサービス

を提供する観光対象または媒介である。一方、主体としての観光者への聞き取り調査も実施されてきた。しかし、観光者の一般的な特性を把握するためにはある程度のサンプル数が必要とされるために、後述するアンケート形式での調査がより一般的に用いられてきた。

Ⅲ-2 統計の取得

観光地理学に関する研究のほとんどは、分析のために統計資料を利用している。一般に、統計の取得に関しては、過去と現在で状況は大きく変わってきた。データのデジタル化とインターネットの普及によって、現在では研究室に居ながらにして、非常に多くの統計を入手することが可能となった。これは観光に関する統計についても同様である。観光庁設立後は全国的に統一基準での観光者統計の整備が進行している。また、国勢調査、経済センサス（事業所統計）、商業統計、交通関係の統計にも観光と関連する項目がある。

しかし、依然として、たとえばローカルな研究対象地域でしか得られない統計データもある。たとえば、それに該当するのはローカルスケールでの観光者数、観光施設数、顧客圏等の観光流動などのデータである。それらは市町村、観光協会、

場合によっては個々の観光施設でデータを得ることになる。

Ⅲ-3 土地利用調査

土地利用調査もしばしば用いられる。その際、多くの研究でみられる調査は、あるスケールの地域において観光資源の分布、宿泊施設、土産物店、飲食店、共同浴場、博物館、観光農園などの観光関連施設の分布をとらえようとするものである。これを通じて、諸施設の分布にみられる集中・分散傾向などが明らかにされる。分析される地域のスケールに応じて、特定の観光資源や観光対象の地域的展開が示されたり、ローカルな地域におけるさまざまな観光資源や関連施設の位置づけなどが示されてきた。一方、とくにローカルなスケールの観光地域について、その性格を解明する手段として、土地利用調査は非常に有効である。観光地域の土地利用を分析することによって、観光に関連する土地利用とそれ以外の多様な土地利用との関係が解明され、また建物の高さや材質・色など、農地の色彩など、目で観察される景観の特質が解明され、観光地域を地誌的に把握することが可能となる。また、後者の場合には土地所有のデータも入手し、土地利用と土地所有との関係、観光地域の構造と土地所有との関係等も併せて考察されることもある。

Ⅲ-4 アンケート調査

アンケート調査は17件の研究で実施されたが、その対象は次のように非常に多様である。まず第1に、観光者や旅館宿泊者といった訪問者に対するものがある。これは、観光地域内で散策している観光者を対象に実施される例もあれば、特定の観光施設や交通手段の利用者、宿泊施設での宿泊客を対象になされる場合もある。宿泊施設等での調査では、その施設の賛同が得られれば、調査自体を依頼することも可能な場合もある。山村(1974:1995:262-263)には、その調査票の例がある。一方、GPSを利用して観光者の行動パターンのデータを得た研究もある。動物園の訪問者に

GPS 機材を渡し、彼らが園内をどのように回遊するのかについての空間データを取得した。

第2に、観光行動圏をはじめとする観光行動の一般性を追求するために、ある地域の住民を対象にするアンケート調査もなされてきた。しばしば使用されてきた方法は学校の児童・生徒に配布し、その保護者や家族に回答してもらう方法である。リゾートクラブ会員や案内所訪問者といった特定の属性を有する人びとに対して、観光行動や観光地域の評価などを訊ねる調査もある。

第3に、宿泊施設などの観光関連施設について多くの情報、たとえば宿泊施設の開業年や労働力など、を得るために、それらの施設を対象としたアンケート調査も多くみられる。その例は山村(1974)にみられる。ある地域で対象とする施設が少数であれば、全て聞き取り調査を実施することが可能であるが、対象が多数であればアンケート調査を実施せざるを得ない。アンケート調査後に、詳細に回答した方に聞き取り調査を実施する方法もあろう。ただし、近年、個人情報取扱の厳格化が進んでおり、施設や個人のプライベートに関連する事項は、アンケート調査では訊ねにくくなりつつある。

第4は、観光地域に居住する住民に対するものである。研究事例は少ないが、農村空間において観光開発やルール・ツーリズムを居住者がどのように評価しているのかといった視点で調査がなされている。

Ⅲ-5 その他の調査・データ収集

また、現地でしか得られない文献や地図等の資料収集も重要であろう。市町村誌(史)や郷土誌(史)、とくに後者は現地以外では閲覧・入手が困難である。その入手には図書館訪問が欠かせない。図書館では、そのほか、現地のローカル新聞、郷土史会等による刊行雑誌・報告書、電話帳、住宅地図などを閲覧する際にも重要である。地籍図や土地台帳なども、現地以外では入手の難しい資料であるため、フィールドワークの際に収集が必要になることもある。

近年、観光者向けに刊行されるガイドブック、旅行雑誌、観光パンフレットなども重要な分析資料として認識されるようになってきた。ガイドブックや旅行雑誌は、全国的に入手可能であろうが、一部の観光パンフレット、現地の旅行会社主催のツアーパンフレットなどの中には現地以外では入手できないものもあるので注意が必要である。

IV 観光地理学の研究動向とフィールドワーク

IV-1 観光目的地の研究とフィールドワーク

日本における観光地理学の研究に関する展望論文は複数ある（青木・山村，1976；Takeuchi, 1984；Ishii and Shirasaka, 1988；鶴田，1994a；Kureha, 2010；呉羽，2011）。これらの論文で指摘されてきたことは、観光地理学の分野では、ローカルなスケールの観光目的地に関する研究が卓越することである。

1980年代頃までは、ローカルな地域スケールで観光地域の形成を分析することが主流であった。その対象は、温泉観光地、スキー民宿地域、海岸観光地などであった。そこでは、温泉旅館経営の変化、温泉所有の変化、土地利用と景観の変化、生業・就業構造の変化等に関するデータがフィールドワークを通じて取得されていた。こうしたフィールドワークでは、現地の有力者や観光関連施設等での聞き取り調査が重要な役割を持つと同時に、観光地域の土地利用と景観やそれらの変化を解明するために土地利用調査が実施された。また、それらの結果により厚みを持たせることを意図して、既存の統計や地籍図等の資料で補足することが行われた。

これらのフィールドワークは、現在でも行われており、もちろんある程度の重要性を有する。とくに、現地でしか得られない情報に加えて、統計や文献を収集することが必要で、限られた調査時間内で当該資料にたどり着くことが求められる。現地では、それらも参照しながら聞き取り調査や土地利用調査を実践することが重要であろう。

一方で、観光目的地に関する研究にも、そのイメージを捉えようとする研究、目的地が有する結節点としての性格に注目した研究、目的地の風景に関するものなどが現れてきた。また、ルーラル・ツーリズムやエコツーリズム、まちなみ観光などの新しい観光行動パターンが出現するとそれに対応する研究も増えつつある。さらには、海外の観光目的地への注目も高まっている。

IV-2 観光行動に注目する研究とフィールドワーク

1990年頃から、観光地理学の研究対象はかなり多様化してきた。とくに、観光者の行動に焦点を絞った分析視点が重視されつつある。その背景には、バブル経済崩壊後の不況とともに、日帰り旅行が増えたり、社員旅行などの団体旅行の重要性が低下してきたことがある。かつては、宿泊施設が中心的な観光施設としての役割を果たしていた観光地域において、フィールドワークに基づいた研究が多くなされてきた。日帰り旅行が増えると、そうしたフィールドワークの重要性は低下している。また、上述のようにエコツーリズムやルーラル・ツーリズムなどの、いわゆるオルタナティブ・ツーリズムが重要になってきた。そのなかで、観光者に関するデータをいかに収集するのが、研究の独自性を高めるのに不可欠になりつつある。こうした観光行動の多様化と連動して、研究内容に変化がみられるだけでなく、フィールドワークの内容もまた変化してきた。

かつて1980年代までは、観光行動については、主として観光施設関係者等から間接的に聞く方法がとられてきた。たとえば民宿で顧客の属性や訪問の季節性などを聞き取ったり、大規模旅館から集計データを提供してもらったり、宿帳を閲覧して集計し、顧客圏を分析することが行われていたのである。こうしたフィールドワークでデータが得られたのは、1950年代半ば以降に大きく発展したマス・ツーリズムの性格によるところが大きい。つまり、マス・ツーリズムが有する画一的な性格が、類似した観光行動をもたらしていたためであ

る。しかし、近年は個人情報保護のために、この種のデータを得ることが困難になってきた。また、一部のデータではその信憑性に問題があったという事実もある。例外的に、1960年代、観光流動に注目した研究がある。中学生の家族に対する旅行先アンケート調査や、公的な観光流動調査を分析したものである。

観光行動の多様化とともに、観光地域の訪問者から直接聞く方法が重視されつつあると思われる。しかし、この方法を実践する研究はそれほど多くはない。調査期間が限られていたり、観光目的地で寛いでいる訪問者に対して、詳細な対面調査をすることが困難であるためである。これに代わり、観光者の行動パターンをみるために、既存の別の資料を利用する分析が増えている。たとえば、ガイドブックは多くの観光者が利用するものであり、観光者はそこに記載されている目的地に滞在することを前提として、観光者の行動パターンを推測することができる。同様に旅行雑誌や観光パンフレットも利用可能であり、また旅行会社で販売されるパッケージツアーのリスト・内容も重要な資料として使用されてきた。つまり、観光情報をデータとして分析する研究が増えており、今後は人びとがインターネット上の観光情報を利用する場合が増えることが予想され、これをいかに分析するのかという視点も重視されよう。一方で、そうした資料について、古いものを収集・分析した、過去の観光行動に関する研究もみられる。ただし、それらの研究において、分析の中心は既存資料を検討することであり、多くの場合、フィールドワークの中心は資料の収集となるであろう。

行動空間の地域スケールと観光目的地の性格によっては、GPSの使用も有効であろう。機材が回収可能な施設内では、訪問者の移動パターンに関するデータが取得できる。またインターネット上に存在する、位置情報が記録された写真なども分析対象となる。

V おわりに

本研究は、観光地理学における過去の研究を対象として、そのなかでどのようなフィールドワークがなされてきたのかを検討してきた。その結果、観光地理学研究におけるフィールドワークの特徴は次のようにまとめられる。

1. 1960年以降に日本で刊行された主要査読雑誌（学会誌）に掲載された、103件の観光地理学分野の論文を分析対象とした。その中で、フィールドワークによってオリジナルなデータを得る方法として最も多くみられたものは、聞き取り調査であった。全体のおよそ7割の研究において、聞き取り調査によってオリジナルなデータが得られていた。これに次ぐのが、統計取得、土地利用調査、アンケート調査であった。
2. フィールドワークの方法と観光地理学の研究動向とを関連づけて考えると、かつて1980年代までは観光目的地に関する研究が卓越し、そこでは聞き取り調査に加えて、土地利用調査が重要な役割を有していた。しかし、1990年頃以降、オルタナティブ・ツーリズムが発展してくると、観光行動は多様化し、観光者自体の行動を分析する研究の必要性が高まってきた。しかし、観光者に対してフィールドで聞き取り調査やアンケート調査を実施する研究に加えて、近年ではガイドブックなどに基づいて観光行動を分析するような研究も増えている。
3. 本研究の対象は、査読誌に限定されている。一般に、査読誌には学界の発展に大いに貢献したり、既存研究の間隙を埋める優れた研究が掲載される。しかし、観光地理学分野に限らず、多くの研究分野では、査読誌以外に掲載される学術論文も多い。さらには観光地理学分野に関しては、多くの調査報告がある。それは観光が身近な研究対象と認識されているためであろう。こうした研究にはローカルなスケールの観光目的地を分析したものも多い。ここでは、やはり聞き取り調査がフィールドワークの中心になっていると考えられる。

4. 今後も日本をめぐる観光の変化とともに、観光地理学の研究内容も変化することが予想される。たとえば、近年では国際観光が盛んになっており、外国人によるインバウンド・ツーリズム

ム、日本人によるアウトバウンド・ツーリズムも新しい研究課題になっている。それら进行分析の際にどのようなフィールドワークが実践されるのかについても興味深い。

本研究を遂行するにあたって、平成22～25年度科学研究費補助金（基盤研究（A））「フィールドワーク方法論の体系化－データの取得・管理・流通に関する研究－」（研究代表者 村山祐司）の一部を用いた。

【文献】

- 青木栄一・山村順次（1976）：日本における観光地理学研究の系譜。人文地理，**28**，171-194
- 浅野敏久（2002）：宮島におけるエコツーリズムの試み。地理科学，**57**，194-207.
- 浅野敏久・フンク カロリン・斎藤丈士・佐藤裕哉（2005）：地方都市のホテル立地にみる都市の規模と機能：広島県東広島市を事例に。地理科学，**60**，281-301.
- 荒山正彦（1995）：文化のオーセンティシティと国立公園の成立－観光現象を対象とした人文地理学研究の課題－。地理学評論，**68**，792-810.
- 有馬貴之（2010）：動物園來園者の空間利用とその特性：上野動物園と多摩動物公園の比較。地理学評論，**83**，353-374.
- 井口 梓・田林 明・ワルデチュック トム（2008）：石垣イチゴ地域にみる農村空間の商品化：静岡市増集落を事例として。新地理，**56**(2)，1-20.
- 池 俊介（1986）：長野県蓼科の観光地化による入会林野利用の変容。地理学評論，**59**，131-153.
- 池 俊介（2000）：伊東市富戸におけるスキューバダイビング導入に伴う地域社会の変容。新地理，**48**(4)，18-37.
- 池 俊介・有賀さつき（1999）：伊豆半島大瀬崎におけるダイビング観光地の発展。新地理，**47**(2)，1-22.
- 池永正人（1992）：スイスアルプス山村の社会的休閒地問題。人文地理，**44**，413-432.
- 池永正人（1999）：オーストリアアルプスにおける山岳観光の発展と山地農民の対応－チロル州フィス村を事例として。人文地理，**51**，598-615.
- 池永正人（2000）：オーストリアアルプス・レンゲンフェルト村における山岳観光の発展と山地農民の対応。新地理，**48**(1)，17-36.
- 池永正人（2001）：オーストリアアルプス・ヒンターホルンバッハ村におけるアルム利用の推移とエコツーリズム。人文地理，**53**，556-573.
- 池永正人（2003）：オーストリアアルプスの山岳観光と山地農民：チロル州を事例として。地理科学，**58**，163-170.
- 石井英也（1970）：わが国における民宿地域形成についての予察的考察。地理学評論，**43**，607-622.
- 石井英也（1977）：白馬村における民宿地域の形成。人文地理，**29**，1-25.
- 石澤 孝・小林 博（1991）：都市における宿泊施設の立地と推移－長野市を例として。東北地理，**43**，30-40.
- 石原照敏（2009）：スイス・高アルプスにおける観光業と農業の共生形態と共生システム。経済地理学年報，**55**，369-389.
- 岩鼻通明（1981）：観光地化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌。人文地理，**33**，458-472.
- 岩鼻通明（1999）：観光地化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌（第3報）。季刊地理学，**51**，19-27.
- 上江洲薫（2001）：観光地域における企業の土地所有と観光開発の展開：恩納村を事例として。人文地理，**53**，463-476.
- 内田順文（1989）：軽井沢における「高級避暑地・別荘地」のイメージの定着について。地理学評論，**62**，495-512.
- 大野希一（2011）：大地の遺産を用いた地域振興：島原半島ジオパークにおけるジオストーリーの例。地

- 学雑誌, **120**, 834-845.
- 大橋めぐみ (2002): 日本の条件不利地域におけるルーラルツーリズムの可能性と限界: 長野県栄村秋山郷を事例として. 地理学評論, **75**, 139-153.
- 小口千明 (1985): 日本における海水浴の受容と明治期の海水浴. 人文地理, **37**, 215-229.
- 尾崎帛四郎 (1976): 日本におけるゴルフ場に関する一考察. 地理学評論, **49**, 400-408.
- 落合康浩 (1991): 神奈川県中西部における余暇活動の空間的展開. 経済地理学年報, **37**, 245-265.
- 落合康浩・水嶋一雄 (2004): パキスタン北部地域ゴジャール地区の地域開発による生活の変化. 地学雑誌, **113**, 312-329.
- 小原規宏 (2005): ドイツバイエルン州における農村の再編とその持続性. 地学雑誌, **114**, 579-598.
- 神谷秀彦 (1993): 高冷地山村長野県開田村の観光地化. 人文地理, **45**, 68-82.
- 川口裕輔 (1997): 新潟県湯沢町中子地区におけるリゾートマンション集中立地の歴史的背景. 季刊地理学, **49**, 151-162.
- 神田孝治 (2001): 南紀白浜温泉の形成過程と他所イメージの関係性: 近代期における観光空間の生産についての省察. 人文地理, **53**, 430-451.
- 神田孝治 (2011): 日本統治期台湾における国立公園の風景地選定と心象地理. 歴史地理学, **53**(3), 1-26.
- 菊地俊夫・有馬貴之 (2011): オーストラリアにおけるジオツーリズムの諸相と地域振興への貢献. 地学雑誌, **120**, 743-760.
- 金 玉実 (2009): 日本における中国人旅行者行動の空間的特徴. 地理学評論, **82**, 332-345.
- 呉羽正昭 (1991): 群馬県片品村におけるスキー観光地域の形成. 地理学評論, **64**, 818-838.
- 呉羽正昭 (2001): 東チロルにおける観光業と農業の共生システム. 地学雑誌, **110**, 631-649.
- 呉羽正昭 (2009): 日本におけるスキー観光の衰退と再生の可能性. 地理科学, **64**, 168-177.
- 呉羽正昭 (2011): 観光地理学研究. 江口信清・藤巻正己編『観光研究レファレンスデータベース』ナカニシヤ出版, 11-20.
- 小池洋一 (1960): 都市住民のレクリエーション形態とその地域的關係. 地理学評論, **33**, 615-625.
- 小池洋一 (1961): 商圏と遊覧圏. 人文地理, **13**, 365-376.
- 河野敬一 (1993): 長野県小諸における宿泊圏の変化: 近代の中位中心地変容の一側面. 地理学評論, **66**, 59-80.
- 小島大輔 (2008): 熊本市における観光行動の空間的特性: 主要施設来訪者の行動分析から. 地理科学, **63**, 49-65.
- 小島大輔 (2009): カナダにおける日本人向け旅行業の展開過程. 地理学評論, **82**, 604-617.
- 小西正雄 (1980): 妙高高原・杉野沢地区における民宿村の成立過程とその内部構造. 人文地理, **32**, 312-327.
- 佐藤大祐 (2001): 相模湾・東京湾におけるマリーナの立地と海域利用. 地理学評論, **74**, 452-469.
- 佐藤大祐 (2003): 明治・大正期におけるヨットの伝播と受容基盤. 地理学評論, **76**, 599-615.
- 佐藤大祐 (2003): 霞ヶ浦地域におけるプレジャーボート活動の展開と行動水域. 地学雑誌, **112**, 95-113.
- 佐藤大祐・斎藤 功 (2004): 明治・大正期の軽井沢における高原避暑地の形成と別荘所有者の変遷. 歴史地理学, **46**(3), 1-20.
- 白坂 蕃 (1976): 野沢温泉村におけるスキー場の立地と発展 - 日本におけるスキー場の地理学的研究 - 1. 地理学評論, **49**, 341-360.
- 白坂 蕃 (1982): 中央高地拇池高原における新しいスキー集落の形成. 地理学評論, **55**, 566-586.
- 鈴木晃志郎・若林芳樹 (2008): 日本と英語圏の旅行案内書からみた東京の観光名所の空間分析. 地学雑誌, **117**, 522-533.
- 鈴木富之 (2011): 東京山谷地域における宿泊施設の変容: 外国人旅行者およびビジネス客向け低廉宿泊施設を対象に. 地学雑誌, **120**, 466-485.
- 須山 聡 (2003): 富山県井波町瑞泉寺門前町における景観の再構成: 観光の舞台・工業の舞台. 地理学評論,

- 76, 957-978.
- 滝波章弘 (1994) : ツーリズム空間の同心円性と関係距離の抽出－横浜市立小学校家庭の家族旅行のデータから. 人文地理, **46**, 121-143.
- 滝波章弘 (1995) : ギド・ブルーにみるパリのツーリズム空間記述－雰囲気とモニュメントの対比－. 地理学評論, **68**, 145-167.
- 滝波章弘 (1996) : プレッドの行動行列による観光客行動の分析. 地理学評論, **69**, 757-769.
- 滝波章弘 (1998) : ツーリスト経験と対照性の構築－『旅』の読者旅行文をもとに－. 人文地理, **50**, 24-46.
- 滝波章弘 (2003) : ジュネーブの代表的ホテルにおける雰囲気の意味：ホテル側からの視点を中心に. 地理学評論, **76**, 621-644.
- 田辺一彦 (1988) : 観光農園についての若干の考察－兵庫県水上郡春日町春日を事例として. 人文地理, **40**, 355-367.
- 田林 明 (1976) : 観光地化に伴う沿岸集落の変容：南伊豆・石廊崎の事例. 経済地理学年報, **22**, 1-19.
- 淡野明彦 (1974) : 私鉄資本の進出に伴う秩父地方の変容. 地理学評論, **47**, 498-510.
- 淡野明彦 (1980) : 観光開発の地域的インパクトに関する考察－三重県奥志摩地域の事例－. 新地理, **28**(1), 9-18.
- 淡野明彦 (1985) : 沿岸域における民宿型観光地域の形成－三重県鳥羽市相模地区の事例. 地理学評論, **58**, 19-38.
- 淡野明彦 (1986) : 沿岸域におけるリゾート型観光地域の形成－三重県志摩郡浜島町迫子地区の事例. 人文地理, **38**, 7-25.
- 鶴田英一 (1994a) : 観光地理学の現状と課題－日本と英語圏の研究の止揚に向けて. 人文地理, **46**, 66-84.
- 鶴田英一 (1994b) : 会員制リゾートクラブにみる資本の運動と施設の立地展開. 地理学評論, **67**, 101-125.
- 鶴田英一 (2000) : ホテルの立地展開と稼働率. 経済地理学年報, **46**, 380-394.
- 富川久美子 (2005) : ドイツ・バイエルン州南部パート・ヒンデラングにおける農家民宿の経営分化. 地理学評論, **78**, 976-986.
- 内藤嘉昭 (1995) : シンガポールにおける人口構成と観光特性. 人文地理, **47**, 501-511.
- 中井達郎 (2002) : 地域にとってのエコツーリズム：小笠原での試みと課題. 地理科学, **57**, 187-193.
- 中尾千明 (2006) : 歴史的町並み保存地区における住民意識－福島県下郷町大内宿を事例に. 歴史地理学, **48**(1), 18-34.
- 中山昭則 (2000) : 自然休養村事業による観光振興と地域の活性化－山形県飯豊町中津川地区を例として. 人文地理, **52**, 372-384.
- 野本晃史 (1962) : 観光客流動圏の形態からみた観光地類型とその分布. 人文地理, **14**, 274-288.
- 濱田琢司 (2002) : 観光ガイドブックに見る地域と工芸：九州地方のやきもの場合. 地理科学, **57**, 105-119.
- 林 琢也 (2007) : 青森県南部町名川地域における観光農業の発展要因：地域リーダーの役割に注目して. 地理学評論, **80**, 635-659.
- 福田珠己 (1996) : 赤瓦は何を語るか：沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動. 地理学評論, **69**, 727-743.
- フंक カロリン (2000) : 瀬戸内海：「観光地域」の可能性. 地理科学, **55**, 181-191.
- フंक カロリン・淡野明彦 (1997) : ドイツ・プファルツ地方における観光・レクリエーション空間の組織化. 地学雑誌, **106**, 31-48.
- 牧田 肇 (2002) : 新興の観光対象「世界遺産・白神山地」とエコツーリズムの模索. 地理科学, **57**, 176-186.
- 松村公明 (1996) : 仙台市における宿泊機能の立地特性. 地学雑誌, **105**, 613-628.

- 溝尾良隆 (1991) : わが国におけるリゾート開発の課題と展望. 経済地理学年報, **37**, 39-50.
- 溝尾良隆 (1996) : 群馬県新治村におけるリゾート開発計画とリゾート地域の形成過程. 経済地理学年報, **42**, 160-174.
- 溝尾良隆・市原洋右・渡辺貴介・毛塚 宏 (1975) : 多次元解析による観光資源の評価. 地理学評論, **48**, 694-711.
- 溝尾良隆・大隅 昇 (1983) : 景観評価に関する地理学的研究－わが国の湖沼を事例にして. 人文地理, **35**, 40-56.
- 溝尾良隆・菅原由美子 (2000) : 川越市一番街商店街地域における商業振興と町並み保全. 人文地理, **52**, 300-315.
- 森 正人 (2002) : 近代における空間の編成と四国遍路の変容－両大戦間期を中心に. 人文地理, **54**, 535-556.
- 森本 泉 (1998) : ネパール・ポカラにおけるツーリストエリアの形成と民族「企業家」の活動. 地理学評論, **71**, 272-293.
- 八木浩司・高野岳彦・中村 靖・村山良之・檜垣大助 (1991) : 東北地方におけるスキー場開発の推移とその立地類型. 東北地理, **43**, 161-180.
- 矢嶋 巖 (2004) : 山間地域における生活用水・排水システムの変容－スキー観光地域兵庫県関岡町熊次地区. 人文地理, **56**, 410-426.
- 山口泰史 (2008) : 庄内地域における外国人旅行者の満足度について：庄内空港チャーター便ツアー客を対象に. 季刊地理学, **60**, 109-113.
- 山村順次 (1967) : 東京観光圏における温泉観光地の地域的展開－温泉観光地の研究（第1報）－. 地理学評論, **40**, 625-643.
- 山村順次 (1969a) : 伊香保・鬼怒川における温泉観光集落の発達と経済的機能－温泉観光地の研究－2－. 地理学評論, **42**, 295-313.
- 山村順次 (1969b) : 伊香保・鬼怒川における温泉観光集落形成の意義－集落の社会経済構造からみた－. 地理学評論, **42**, 489-505.
- 山村順次 (1974) : 観光地調査法. 浅香幸雄・山村順次編：『観光地理学』大明堂, 204-216.
- 山村順次 (1976) : 長野県鹿教湯療養温泉集落の形成と構造. 地理学評論, **49**, 699-713.
- 山村順次 (1980) : 日本温泉観光地の入湯客の地域的・季節的特性. 地理科学, **33**, 1-13.
- 山村順次 (1995) : 『新観光地理学』大明堂.
- 横山 智 (2007) : 途上国農村におけるバックパッカー・エンクレープの形成－ラオス・ヴァンヴィエン地区を事例として－. 地理学評論, **80**, 591-613.
- 若生広子・高橋伸夫・松井圭介 (2001) : ライフステージからみた女性の観光行動における空間的特性：仙台市北部住宅地の居住女性を事例として. 新地理, **49**(3), 12-33.
- 渡辺悌二 (2003) : 日本の山岳国立公園におけるツーリズムと自然環境保全：ヒマラヤから学ぶこと. 地理科学, **58**, 146-156.
- Cooper, M. and Erfurt-Cooper P. (2009) : Beppu reconstruction: A domestic hot spring destination in search of a 21st century global role. *Geographical Sciences*, **64**, 127-139.
- Funck, C. (2000) : Chances and constraints: A case study on the influence of tourist behaviour on regional development in peripheral mountain areas in Japan. *Geographical Sciences*, **55**, 213-230.
- Ishii, H. and Shirasaka, S. (1988) : Recent studies on recreational geography in Japan. *Geographical Review of Japan*, **61B**, 635-659.
- Kureha, M. (2004) : Changes in outbound tourism from the Visegrad Countries to Austria. *Geographical Review of Japan*, **77**, 262-275.
- Kureha, M. (2010) : Research trends in the geography of tourism in Japan. *Japanese Journal of Human Geography*, **62**, 558-569.
- Maruyama H., Nihei, T. and Nishiwaki, Y. (2005) : Ecotourism in the North Pantanal Brazil: Regional

- bases and subjects for sustainable development. *Geographical review of Japan*, **78**, 289-310.
- Saito I. and Kanno M. (1990) : Development of private sports facilities as a side business of urban farmers. *Geographical review of Japan Series B*, **63**, 48-59.
- Shirasaka S. (1984) : Skiing grounds and ski settlements in Japan. *Geographical Review of Japan Series B*, **57**, 141-149.
- Takeuchi, K. (1984) : Some remarks on the geography of tourism in Japan. *Geojournal*, **9**, 85-90.
- Tran Thi Mai Hoa and Noma H. (2012) : Development of Japanese-style ecotourism based on school excursion: A case study in Iida City Nagano Prefecture. *Japanese Journal of Human Geography*, **64**, 299-318.

英文タイトル

A Discussion on Field Work in Geographical Studies of Tourism in Japan

KUREHA Masaaki